

・ < 論考 > :

1 . スポーツインターナショナルとコミンテルン

モスクワ・アルヒーフ調査に基づいて

上野 卓郎

はじめに

本稿は、両大戦間期のスポーツインターナショナルのアルヒーフ資料収集を目的としたモスクワ・アルヒーフ調査（2003年2～3月、4月）についての第一次報告である。

以下ではまず、赤色スポーツインターナショナル（RSI、スポルチンテルン）史料の所蔵が確認できていながらその調査の機縁を得られず、今回初めて訪問し得たロシア国立社会・政治史アルヒーフ（ロシア語略称RGASPI）での調査結果を報告したい。そのさいこのアルヒーフ史料に基づく最新の先行研究 グノ（2002年）とキーズ（2001年）の研究成果と資料問題も論じることとする。

次に、収集史料から整理・訳出したものを、第一に、1937年スポルチンテルン解散コミンテルン決議・内部文書9点、第二に、1935-36年のRSIに関するコミンテルン決議・内部文書13点、第三に、補遺としてコミンテルン政治局フォンド所収スポルチンテルン関係文書メモ他3点、第四に、数点しか現存しないと思われたRSI刊行物『スポーツプレス』（1936年）全30号他1点、第五に、オリンピック理念擁護国際委員会刊行物9点（目録）に分類して、紹介する。なお、1921年RSI創立期の収集史料も重要な成果ではあるが、それについては今回の報告では省くことにした。また、20年代と30年代初頭の史料は断片的にしか収集できなかったため、これについても省略した。

収集史料に基づく研究の時期と問題は、1936

年前後のスポーツ運動の課題と展望をめぐるRSIとコミンテルンの関係を軸に、国際労働者スポーツ運動の統一問題、36年ベルリン・オリンピック反対運動の国際的展開とオリンピック理念擁護国際委員会の活動、人民オリンピックと、労働者スポーツの枠を超えた人民スポーツ運動でのオルタナティヴ提起、37年アントワープ労働者オリンピックアードの評価、ソビエト・スポーツの「ブルジョア化」（国際スポーツへの参加）への抵抗と順応、コミンテルンによるスポーツ運動の位置付け、RSIの役割と限界、その組織構造などスポーツ運動史における重要な論点が重層化する構造として、解明されなければならない。

先年、社会主義労働者スポーツインターナショナル（SASII）とRSIの交渉をボン、プラハ、ロンドンのアルヒーフ資料で再構成した『1930年代二つのスポーツインターナショナル関係史』は、モスクワ・アルヒーフ資料によって補完・修正され、なお新たな関係史像を形成することになる。『関係史』論稿の段階ではスポーツインターナショナルとコミンテルンの関係については全く霧の中だったし、1937年RSI解散の史実問題だけでも、グノ、キーズ以前の先行研究が確定資料を示せずにいたのである。今回の調査でその確定資料を入手したが、その資料の周辺からグノ、キーズが見落としした重要資料を見出した。これはなお資料批判の途中だが、スポーツインターナショナル史研究の最前線を伝えるために本稿で特に発表するものである。

R G A S P I スポルチンテルン・フォンド

ロシア国立社会・政治史アルヒーフ（R G A S P I）は、モスクワ中心部の旧ソ連共産党マルクス・レーニン主義研究所の4階建ての建物で党アルヒーフとコミンテルン・アルヒーフを主に所蔵し、R S Iの史料を独立してフォンドとしている（スポルチンテルン・フォンド、F. 537）。このフォンドが二つのオーピシという資料分類で分けられ、それぞれにデーロという番号順のファイルが目録化されていて、どのオーピシの何デーロかを請求することになっていた。

このデーロの目録は単に何年のものか、どの国のものかを示すだけで実際にどんな史料があるかは開けてみないとわからなかった。これはボンやプラハでの経験とは異なるものだった。というのは、実はこのモスクワのスポルチンテルン・アルヒーフの所蔵が膨大なものだということを目の当たりにしたからである。

目録でのデーロの枚数を数えた結果は次のとおりである。

オーピシ 1（1921 - 1938 年）に 302 デーロ、37229 枚、オーピシ 2（1921 - 1937 年）に 214 デーロ、23999 枚十（1 デーロの枚数を数え損なったため）合計約 61300 枚。

目録の表紙は、「フォンド第 537 号。赤色スポーツインターナショナル（スポルチンテルン、身体文化労働者・農民組織国際連合）」、第 1 オーピシ「スポルチンテルンの大会、協議会、スポルチンテルンの執行委員会、幹部会、書記局。1921 - 1938 年」、第 2 オーピシ「スポルチンテルンの執行委員会、幹部会、書記局と様々な国のスポルチンテルン組織の指導部との往復書簡。1921 年 - 1937 年」となっている。

目録序文

オーピシ 1 に付せられた目録序文（コピー禁止のため筆写。ロシア語旧式タイプ稿で印字が薄く、部分的に滲んでいたが、何とか判読）の全文を紹

介する。序文の日付けはないが、オーピシに作成時期が 1971 年と記されている（訳出には島田顕氏（本学社会学研究科博士後期課程）の協力を得た。[] は訳注）。

「赤色スポーツインターナショナル（K S I [ロシア語表記、以下ではドイツ語表記 R S I とする]、スポルチンテルン）は、労働者・農民の身体文化諸組織の連合として 1921 年 7 月にモスクワで創設された。それらの諸組織は、R S I の規約で示されるように、『プロレタリア階級闘争のプラットフォームに』立つものであった。スポルチンテルンは、勤労者大衆の中での組織的スポーツ活動をイデオロギー教育と緊密に結びつけることを追求し、資本主義機構に反対する鍛えられた闘士の養成という全体的目標を自ら掲げた。

R S I は、コミンテルン、進歩的な国際諸組織、各国共産党、青年同盟との緊密な連係の下に活動した。R S I は世界のプロレタリアートに、その階級闘争において、ファシズムと戦争の脅威との闘争において幾らかの力を寄せた。1937 年に R S I は解散したが、多くの国では、統一した全国労働者スポーツ連盟を強化する活動が続けられた[この「1937 年に」以下の一文に注意]。

R S I の指導諸機関は、執行委員会、幹部会、書記局、R S I 執行委員会ベルリンビューローである。様々な国に身体文化連盟 R S I の支部が存在した。R S I の機構内のこれらの下位部門のそれぞれの文書、また、それらと他の多くの諸機関、諸組織、団体との間の往復書簡が、R S I 文書フォンドを形成している[この部分は第 2 オーピシについての解説だが、これについては後述]

第 1 オーピシには、R S I の大会（コングレス）、協議会（コンフェレンツ）、R S I 執行委員会総会（プレナム）の資料、また執行委員会の日常の資料が入っている。

オニピシは 5 つの部門から成っている。I -

部門は 4 つの大会、3 つの協議会、6 つの執行委員会総会の文書史料を含んでいる。この文書史料の始めと終わりの日付けは 1921 - 1931 年である [ただし、協議会文書は 1927 年の 38 - 42 デーロ、1933 年の 43 デーロ、1936 年の 44 デーロである]。

大会、協議会、総会は準備段階の文書と会議自体の資料に十分に反映されている。しかし、第 W 回総会はオーピシでは一つの決議と総会へのテーゼしかない。

一連の大会（特に第 回 1924 年 10 - 11 月）の議事録と決議は R S I 執行委員会によって大幅に訂正されている。その訂正の合法性が大会参加者によって R S I 執行委員会との往復書簡の中で争われた。それゆえ、これらの文書史料に対しては用心深くアプローチすることが必要であり、それらをフォンドの他の資料と比較しなければならない [この大会文書だけで 4 - 19 デーロ、2160 枚を数える]。

第 W 部門は、R S I 執行委員会、幹部会、書記局、また諸委員会（諸部署）のあらゆる日常の文書史料が収められている。

この部門の文書史料は年毎に次のような規則で配置されている。すなわち、会議の議事録（プロトコル）、速記録（ステノグラム）、決議（レゾリューション）、指令（ディレクティブ）、回状（サーキュラー）、草案（プラン）、報告（ベリヒト）、演説（フォアトラーク）、情報概括、往復書簡である。加えて、諸委員会、諸部署のあらゆる文書史料が各年末の執行委員会（幹部会、書記局）の往復書簡の後に配置されている。

この部門（そしてその次の部門）には R S I 執行委員会議長 N.I.ポドヴォイスキーの文書史料と幾らか一体化したのものがある。これらの資料は作成者の取捨選択としてオーピシに選り分けられて入れられた。というのは、それは当時ポドヴォイスキー自身によって体系化されたからである（80、91、103、115 - 118、126、144 のデーロ）。

第 V 部門は R S I のアジ・プロ（煽動・宣伝）

資料である。ここには新聞情報の集成、スポルチンテルン刊行物と様々な機関の定期的プレスからの切抜きと抜き書き、執行委員会で集められたその他のプロパガンダ資料が入っている。オーピシの最後にはスポルチンテルン執行委員会の大量の公報（ビュレティン）がある（259 - 302 のデーロ）。

第 1 オーピシの資料言語は大半ドイツ語であり、ロシア語のみのものは少なかった。

第 2 オーピシは、国別に分類されていた。国名の後の番号はデーロである。オーストラリア（1）、オーストリア（2 - 11）、イギリス（12 - 15）、アルゼンチン（16 - 21）、ベルギー（22）、ブルガリア（23）、ブラジル（24）、ハンガリー（25）、ドイツ（26 - 63）、オランダ（64）、ギリシャ（65）、ザール（66）、スペイン（67）、イタリア（68）、カナダ（69）、キューバ（70、70a）、メキシコ（71）、ノルウェー（72 - 88）、パレスチナ（89）、ポーランド（90）、ポルトガル（91）、ルーマニア（92）、身体文化最高評議会 [ソ連]（93 - 118）、アメリカ（119 - 133）、トルコ（134）、ウルグアイ（135）、フィンランド（136 - 138）、フランス（139 - 164）、チェコスロヴァキア（165 - 199）、スイス（200 - 203）、スウェーデン（204 - 210）、アルザス・ロレーヌ（211）、エストニア（212）、ユーゴスラビア（213）、南アフリカ連邦（214）。以上 35 か国だが、今回調査できたのは、ベルギー、ドイツ、スペイン、身体文化最高評議会、アメリカ、フランス、チェコスロヴァキアの 1936 年前後のデーロだけだった。アジア、日本がなかったのは残念である。

グノとキーズの研究成果と資料問題

アンドレ・グノ『赤色スポーツインターナショナル。1921 - 1937 年。ヨーロッパ労働者スポーツにおける共産主義大衆政策』ミュンスター他、2002 年（Andre Gounot, Die Rote Sportinternationale 1921 - 1937 .Komunistische

Massenpolitik im europäischen Arbeitersport. Münster u.a.2002) と、バーバラ・ジーン・キーズ『スポーツの独裁。1930年代の民族主義、国際主義、大衆文化』ハーバード大学博士論文、2001年5月(未公刊)(Barbara Jean Keys, The Dictatorship of Sport: Nationalism, Internationalism and Mass Culture in the 1930's. PhD Harvard University, May 2001)が最新の先行研究である。

グノはR G A S P Iの改称(1998年)前のロシア現代史記録保管研究センター(そのドイツ語略称R Z A E D N G)の表記で「コミンテルン・アルヒーフ 在庫目録『スポルチンテルン(1921-1937年)』がR S Iアルヒーフを蔵する」としている。キーズはR G A S P Iのロシア語表記を示し、「スポルチンテルンの記録はかつての党アルヒーフ(R G A S P I, fond 537)に保存されている。ただし1930年代の保存は非常に乏しく、不完全で、公けの宣伝が優勢で、内部的意思決定については殆どない。スポルチンテルン関連の記録文書はコミンテルンと共産主義青年インターナショナルのアルヒーフにもばらまかれている」とより明確に記した。キーズがコミンテルン・アルヒーフを f.495 (Komintern) としたのに対して、グノは Bestand495 ("Sekretariat Dimitroff"), Personalakten とし、その一部でしかない「ディミトロフ書記局」人事記録のみを示した。これはグノの資料調査の狭さを意味し、キーズがコミンテルン・アルヒーフでの関連資料を広く調査したことを物語る。ちなみにキーズがグノについて述べたところを紹介する。[]は訳注。「アンドレ・グノは1990年代後期[1998年9月]にベルリン自由大学スポーツ科学研究所での赤色スポーツインターナショナルに関する学位論文を完成した。それは近くフランスで出版される[2002年末ストラスブルで、出版社はドイツのリット社]。学位論文はヨーロッパでの調査と4週間のモスクワでの調査[1994年3月]に基礎を置いている。モスクワで彼は重点的にスポルチンテルンのアルヒーフのドイツ語とフランス語の資

料に頼った。彼の著作はスポルチンテルンの最初の単行本論述である。」

グノ著作

さて、より内在的に彼らの成果と問題を論じよう。グノの著作は、第3章「『ポリシェヴィキ化した』スポーツ組織? R S Iの構造と諸関係(1923-1933年)」が中心的内容をなし、分量も本の半分を占める。彼の叙述には全体として「通史」というより「構造・関係」の理論的枠組みでの資料利用という面がある。R S I創立以降の共産主義青年インターナショナルへの拘束、コミンテルン、共産党によるR S Iの位置付け、ソビエトスポーツの二股性(労働者スポーツとブルジョアスポーツ双方との接触)による抗争関係、R S Iの内部構造、スポーツ実践構想の限界などの詳細な記述は読みごたえがあり、これだけでも十分な成果である。またグノ自身強調するように共産党と労働者スポーツ運動の独仏比較も彼の修士論文(『フランスにおける社会主義と共産主義の忘れられた局面。両大戦間期の労働者スポーツ運動』ベルリン自由大学ロマン語研究所、1992年。Ein vergessener Aspekt des Sozialismus und Kommunismus in Frankreich: Die Arbeitersportbewegung zwischen den beiden Weltkriegen. Magisterarbeit, Institut für Romanistik der FU Berlin 1992)以来の研究を生かしたもので、この著作の骨格をなしている。彼自身認めているように独仏だけでなく他の比較も(例えばイギリス、チェコ、北欧)なされるべきだろう。

上記のアクター(青年インター、コミンテルン、共産党、ソビエトスポーツ)のうちコミンテルンについては直接的資料よりもフランスでの共産主義研究に依拠した論述という印象を受ける。コミンテルン・アルヒーフ利用が「ディミトロフ書記局」人事記録(歴代R S I書記の調書)にとどまることがそれを裏づける(これ自体は初出で重要な成果だが)、R S Iとコミンテルンの通史的關係

構造把握はなお課題として残る。これを明確に確認させたのは、最も関心ある第4章「人民戦線政策一色のRSI(1934-1937年)」におけるRSIとコミンテルンの関係の資料利用の問題であった。第3節の『『競技者の人民戦線』。人民戦線政策と人民オリンピック』は『人民オリンピック・プレスサービス』を利用した記述もあり、「人民スポーツ」についても論及されていて興味深い。第4節の「RSIの最期」はこれに関連するRGASPI資料を十分利用していない。1936年と1937年初頭から6月頃にかけてのRSIとコミンテルンの内部文書は、キーズによって詳細に明らかにされたのである。

キーズ論文

キーズの論文はスポーツのグローバル化をイギリス・スポーツの伝播とアメリカ・スポーツの形成、ナチスドイツとロシア・ソ連のスポーツを国際サッカー連盟FIFAと国際オリンピック委員会IOCのアルヒーフ資料に基づいて描き、特に第5章「オリンピズムへの共産主義オルタナティブ」と第6章「ソビエトの西洋スポーツ受容」にモスクワ資料(主にロシア語のもの)を豊富に利用した記述をあてており、高度の実証性を発揮した優れた論文である。第5章の第3節「1933年以前のスポルチンテルンとソビエトスポーツ外交」、第4節「スポルチンテルンの解散」が特にグノの資料利用との関係で検討される必要がある。なお、キーズはスポーツインターナショナルの通史的枠組みをスタインバーグの画期的な博士論文『赤旗の下のスポーツ』(1979年)に依拠している。

資料的に最も注目すべきは、RSI解散に関わる「コミンテルン執行委員会幹部会会議速記録、1937年3月22日」(原文ドイツ語とロシア語)の利用である。グノはこれを見ていない。ただ、キーズの資料番号表記が異なっており、「コミンテルン・アルヒーフ」の目録で改めて該当データを請求したものの、速記録は非公開扱いで見ること

ができず、しかし、「スポーツ問題についての1937年3月28日のコミンテルン執行委員会幹部会の委員会」の文書を見出した。これをキーズは利用していない。当面「速記録」についてはキーズの記述を引用するしかないが、今回の調査の副産物とも言える委員会文書と、キーズが利用していない他のコミンテルン資料も加味して「RSI解散」を再構成することが課題となる。ここでグノが部分的に利用し、キーズが利用しなかったアクサミットのコミンテルンへの報告文書「スポーツ運動の現在の状態とその今後の発展の展望」(1937年1月9日)の全面的分析がRSI-コミンテルン関係構造把握に寄与するだろう。このアクサミット文書は上記委員会文書ではなく、「スポルチンテルン・アルヒーフ」にあったが、委員会文書の内容と比較して論じる必要がある。

収集資料と研究課題

収集資料(整理訳出したもの)

- 1 1937年スポルチンテルン解散コミンテルン決議・内部文書
「草案。スポルチンテルンの活動に関する決議。秘密」[1937年4月4日] 「RSI書記局をコミンテルンのスポーツ活動補助機関に変換する決議。1937年5月22日。機密！」[1937年5月7日のコミンテルン執行委員会(EKKI)幹部会によって確認された最終本文] 4月11日付けの仏語・独語バージョン 「1937年3月28日EKKI幹部会スポーツ問題委員会文書」「スポーツ問題についての1937年3月28日のEKKI幹部会の委員会の構成」 カルロ・アクサミット「スポーツ運動の現在の状態とその今後の発展の展望(1937年1月9日)」 「スポルチンテルンの主要任務に関するEKKI執行委員会書記局の決議。秘密!草案」[1937年3月25日] 「1936年のスポルチンテルンの活動に関する情報。1937年3月23日。スポルチンテルン書記局」 「スポーツ運動における共産諸党の任務に関する決議。

1937年5月7日。EKKI幹部会」 アクサミット「1937年アントワープ労働者オリンピックアード(1937年2月23日)」

2 1935-36年のRSIに関するコミンテルン決議・内部文書

「RSI執行委員会のフラクシヨンの報告についての1935年5月11日のEKKI政治委員会の決議。機密」「SASIへのRSI返答案への所見。ペーラ・クン。機密」[1935年5月15日のスタンプ]「RSIとSASIの間の新たな交渉と結びついたスポーツ運動の状態について。カルロ・アクサミット。モスクワ、1935年8月21日」「EKKI書記局あて。RSI書記(ジヨルダク)。1935年9月30日」「RSIとSASIの執行委員会の協議に関する報告についてのEKKI書記局の決議案[日付けなし。1935年10月初旬]「SASI事務局あてのRSI執行委員会の書簡案」[1935年10月初め]「スポーツ活動の問題に関する1935年10月27日のEKKI書記局の決議。機密!」「チェコ共産党中央委員会あて」[1935年12月22日のスタンプ]「国際労働者・農民組織スポーツ連盟の情報。(RSI執行委員会)草案」[1936年1月14日頃]「国際反オリンピック協議会の準備と実施に関するスポルチンテルン書記局の決議。(公表不可)」[1936年4月23日]「スペインにおける今後の課題に関するスポルチンテルン書記局の決議」[1936年4月22日頃、非公表]「ジヨルダクからKPD代表ウェーバー同志あて。1936年5月22日」「オリンピックに関するEKKI書記局の決議。極秘」[1936年6月29日]

3 補遺

「コミンテルン政治局フォンド所収スポルチンテルン関係文書」アウスツーク「EKKIのスポーツ問題についての決議。機密」[1933年12月29日、政治局]「パリ・スポーツ会合[スポーツマン行進]の問題について」[アクサミットのEKKIへの報告、1934年8月3日]「RSI執行委員会とSASI事務局の間の一時的な協定

案」[1935年2月20日頃]

4 RSI刊行物

『スポーツプレス』独語版第1-30号(1936年1月11日-12月18日)、第9号欠号。『オリンピック報道通信』第1-16号(1936年7月5日-8月16日)「集成」[日付けなし、1936年6-7月、ギリシャからの人民オリンピックアードのための運動通信]

5 オリンピック理念擁護国際委員会刊行物(表紙書き写し)

『フェアプレイ。通信』第2号(1936年1月末、独語版)『オリンピック理念の勝利のために』(1936年5月、仏語版)同上(独語版)『フェアプレイ』(1936年5月5日[号表記なし]、独語版)『Les Règles Olympiques de l'Amateurisme sont-elles respectées par le sport national-socialiste?』(1936年5月)『フェアプレイ。情報』(1936年5月19日、独語版)『オリンピック・アマチュアエイドをめぐって』(1936年5月、独語版)『進歩か没落か?』(1936年5月、英語版)『フェアプレイ』(日付けなし、独語版)

スポルチンテルン解散コミンテルン決議

ここでは上記1の「RSI書記局をコミンテルンのスポーツ活動補助機関に変換する決議。1937年5月22日。機密!」の全文を訳出紹介したい。これは最新の先行研究で「スポルチンテルン解散コミンテルン決議」と呼ばれ、スポーツインターナショナル史の再構成にとって重要なアルヒーフ資料の中でも第一級の資料であるが、全文紹介はこれが初めてである。グノは4月11日付けの仏語決議のみを取り上げたが、同日付けの独語決議も見出されただけでなく、ここで取り上げる5月22日付けの独語決議は「5月7日のコミンテルン執行委員会幹部会によって確認された最終本文」で、さらに「オリジナル言語ドイツ語。

確認本文ロシア語」という文書付記があることから、これを今後「解散決議」とすべきであろう。なお、4月11日付けの仏・独語のものも内容はこれと変わりはない。

「資本主義諸国における赤色スポーツインターナショナルの主要な全国組織が他の労働者スポーツ組織との融合によって、S A S Iに加入したか、あるいは二つのスポーツインターナショナルの外部にいつまでも留まっていること、

S A S I自身はスポーツに取り組む労働者と勤労者の小さい部分しか掴まず、その狭い政党政治的性格によって進歩的スポーツ運動の団結への道での障害になったこと、

コミンテルンのスポーツ政策全体の重点が諸国に移り、スポーツ活動は個々の共産党自身によって直接指導されねばならないこと、

その結果、R S Iのこれまでの書記局が今後も国際的な、そして個々の国のスポーツ組織を指導するセンターとして行動するのは合目的でないこと、

を考慮して、

コミンテルン執行委員会幹部会は決議する。

1) R S I書記局はスポーツ活動のためのコミンテルンの補助機関に変換される。その主要任務は個々の国での大衆スポーツ政策の展開にさいして各党を全面的に支えることにある。それ以外にこの補助機関はスポーツ生活における全ての事象を体系的に追跡し、資料を集め、様々なスポーツ問題を研究する、等々をすべきである。

2) S A S Iとの接触の目的のために、独立の[二つのスポーツインターから]労働者スポーツ連盟との協同のために、進歩的ブルジョアスポーツ圏との結びつきの維持のために、そしてスポーツ雑誌の発行のために必要であるかぎり、上記の補助機関は今後も公式にR S I書記局として行動すべきである。

3) コミンテルン執行委員会書記局のもとに、スポーツ政策の問題を取り扱う特別なスポーツ

委員会が設立される。」

この「解散決議」を確認した5月7日のコミンテルン執行委員会幹部会は、いわゆる「コミンテルン・スポーツ決議」(上記1の)を採択した。この二つの決議が同時に幹部会の持ち回り決議であったことが分かった。これに先立って幹部会はスポーツ問題についての委員会を開催していた。それは3月28日の委員会文書(1の)所収の3月25日付け書記局決議草案(1の)から4月4日の決議草案(1の)を経て幹部会決議に至ったことを伝えるものであった。委員会文書にはスポルチンテルン書記局の1936年の活動情報(1の)や未訳出の「フランス、イギリス、チェコスロヴァキア、スカンジナビア諸国、スイス、ベルギー、U S A、ドイツにおけるスポーツ運動の状態に関する短い情報」(3月25日付け、スポルチンテルン書記局)も含まれていた。後者は「短い」とされているが、全体では長文のものである。そこにはもはやスペインの情報がないが。

37年3月28日スポーツ問題委員会構成

3月28日の委員会の構成(1の)には18人の参加者の名前しかなく、スポルチンテルン書記局のアクサミット、ジョルダク、ソ連身体文化最高評議会のハルチェンコの他は、コミンテルン幹部会員のフローリン(ドイツ)、ゴットヴァルト(チェコ)、クーシネン(フィンランド)、モスクヴィン(ソ連、本名トリリュッセル、VKP(b)かつ書記局員)、幹部会員候補のブラウダー(アメリカ)、レーヴリエン(ノルウェー)、マイヤー(スイス)、チェモダーノフ(ソ連、VKP(b))、I K Kのイスクロフ(ブルガリア)、ステイン(ポーランド・本名クライエフスキー)、VKP(b)翻訳ビューロー責任者のクリローヴァ(ソ連)が、R G A S P Iで購入した『コミンテルンの組織構造』(モスクワ、1997年)と邦訳『コミンテルン人名事典』の参照で半朔したが、Arnotがアーノット(イギリス)かアルノ(アメリカ、『共産主義インターナシ

ヨナル』誌常勤職員)か、ベルナルドが本名コンザレス・アルベルディ・パウリ(アルゼンチン)なのか本名クララ(ドイツ)なのか、ケンプがキャンベル(イギリス)なら幹部会員候補だが、と未確認の人物があり、全く不明の名前としてアルテンベルクがあるというのが、この委員会構成研究の到達点である。なお、VKP(b)はソ連共産党(ポリシェヴィキ)の略号である。

立ち入った研究課題として取り組む必要があるのは、3・28委員会文書の3月23日付けコミンテルン書記局決議草案と4月4日付け決議草案の比較分析、それらと3月22日幹部会会議速記録に見られる3・28委員会参加者の発言の採否状況の解明、そして全体の議論の基礎を形成したと思われるアクサミットの1月9日文書(1の)とスボルチンテルン書記局の3月23日文書の内容分析・コミンテルンによる採否結果の確認、以上に基づく、5月7日のコミンテルン幹部会の二つの決議のつき合わせ、である。その研究成果の報告を次回には行いたいと考えている。グノの著作の全訳(数箇所を除いて)も2004年夏学期の大学院授業で手直しができたので、この紹介を何らかの形で行いたい。



(RGASPI 前にて)